



生態工房な日々

スタッフが日々のあれやこれやを語ります

公園の生物多様性を向上させる方策について管理者や活動団体と話をする、たいてい、生きものがある小さなスポットづくり……たとえば草地の一面を囲って草むらにするなどの案が出てきます。そして、チョウの庭も作ろう、トンボの池もいいね、と盛り上がるのが定番です。

でもわたしは、こういうスポットづくりを、生物多様性の取組を小さくしてしまう「毒まんじゅう」だと考えています。みどりいっぱい広い公園なのですから、「生きものを保全するのはこの地点」と限定し、あとの大部分の空間では生物多様性なんか考えない、では十分な取組とは言えません。小さいことを2つくらいやって「SDGsに取り組んでいます」とアピールするのと、どこか似ています。「生きものがあるスポットのある公園」ではなく、「公園全体の生物多様性の向上」を目指すのが本筋です。

公園の草地に昆虫や野草が乏しいのは、草丈が低すぎるから。草刈りの回数を見直せば、園内の草地全体を、今よりも良い環境に転換できます。相手の要求通りにテクニックや情報を教示して取組をこじんまりさせてしまうのは、専門家の罪です。あんこではなく苦い薬が入ったまんじゅうを出す、そんな専門家が必要だと思っています。

佐藤 方博
(さとう まさひろ)

最近の関心事は、保全作業やモニタリングを、大勢の普通の市民や関係者で、みんなでやっちゃうことです。

